大岡政談

村井長庵調合机

元岡徹太郎編輯

六編 四

へ14
873
19

873
19

873
19

大岡政談 村井長菴調合机巻之十九

三十四回の續き

東京 元岡維則編次

久八

三州藤川在農久左エ門養子
三河町二丁目伊勢屋五兵衛方住
同時新右衛門同居

甚方ゑ。元主人伊勢屋五兵衛殺害。千左郎を吉原遊廓下に於て
殺害致し。不届至極。刑法に付き。るべきの事迄を遂げ
千左郎未だ生子の取極め。実を以て。自の不品行。
異見し。畢竟一微の源初より。激怒を発し。る矣を生じ。情実れ
ども。強て奉公中千左郎へ対し。当吏の計ひ数度の罪科。後実又
千之助四と五と兩。五注。亟宵助の陰相頼ひ。特別の力を乗て。

刑一等を和らげられ遠島申付るるの也

三河町一丁目家持　質屋新兵衛　伊勢屋五兵衛

冥加町二丁目地借　古着商　甲州屋平七郎

石町三丁目地借　米商　藤屋新六

赤坂伝馬町三丁目書助　孝助後家　伯父　六右衛門

同町　家主　長助

其方共一同取調の儀別段不埒に筋も無之に付何とも様ひ難し

麹町三丁目　家主共

名主共

其方共店並に町内と雖も村井長庵なる者に有之

しかるに永年養母に限り屋敷に住り

町殺人　一同

其方共。居宅並に町内の一件。支々申口あり。吟味等もろもろ

一同落着にわ成ひ。向後第事決して無之べくの也

三州岡崎在岩井村　村井長庵

三丁目家を借り居　名は江戸麹町

此者義。三州岡崎在岩井村と云所生

生を脱藩致し。長崎に於て。博徒三次と申者を相撲ひ江戸表に出

医業と云て麹町三丁目に開業し。主の邸第十三歳と欺き。長女ふみを姦

殺させ右母に代金掠奪し郷策とる。芝札の辻に於て同人を殺害し。

其金を奪ひ手負ひ女をみを抱引寄り十三歳妻と同棲し後に偽
し。淺草中田甫に於て殺害させ後同類に毒婦さだと中女ひさを共に
服毒をなす。依て相代て家財の悉く雌雄の亡
物を略奪し。扨又二人の町伊勢屋五郎右衛門より五十四の金を
略奪せり。其外数件奸謀をなす。金銀器械略奪悪行数多且
金子ハ飲酒狂女に費し。手業等迷惑に成て不届千万
市中引回し。獄門に梟す。

甲州手宿

此者俗生に脱藉し。深酒中毒の病に陥り
し。共に江戸表へ出奔し。中田甫に於て
やまとを殺害し。手外種を同人に奪取し。悪の為働き仕候
知恵を付給が為に出る。獄つ伝の老婆

三次

大岡越州の斯の如くに御政治なる事実に神の
如方なり。なを平の晋日寛狂の接死を逆し。若掛合手宿
なる悪徒も改めず。婦人の為に悪業の越度を
清廉に御下知なる長右衛門奸悪も大岡の深智に捉られ生涯
乃至牢に入て吐長して手鞠さ庭を見老婆の貞婦の念力神明も
通ぜしに有るなり。扨も村井長右衛門の人
民スハ麹町乃奸賊長右衛門を立仕に成めるとなく。老若見物の為踏
死溺し。口々に悔み傷らぬ者なし。扨も愧ざる長右衛門市中を引回さる

聚文堂蔵版

絶て給ず無水ぐ引き込ぬ蓮華の莫堂く泣ぶして刑場へ
ゆき法ろに出る長刀元の夫婦と共に合掌乃ち業の為と消へくまり。
是を助けし小兵衛の三郎も同る刑せらるゝ。又心地よくぞ思ひ
又久八が身代ハ金場へ流罪この命ひ申し出ぬ瓶の日ふ為りけるバ初る人
結髪をこそ惟し。奈出れの情ふ和り呂蔵別離を遂ぶ望眺しく
かるたり歌るに將軍家紅涙く大赦を行ひ給ふ有く公ふ也久八
が恩義を感賞有り赦の中く如くひ罪科を赦免
有りく四海帰付ら也ぬ。初ち形ちさ引渡しるべ物初る人をこの仁
政を言伝せざるハ。伊勢名物を清久八が商人て知る忠孝を
初ち新たに振れして古ろに賞ひ元んと乞ふ形ちゆくゆ元る。

兄久左衛門に報知して。勅ぬ悦ひ。久左衛門今ハ二男を儲け。お徳ふに
る勝愛かし。幸ひ有りて形ちさこに住せ。ひ所に迷ひ出ん中。
為り。形ちまべ久八形ちが計ひにく。ア故甲州屋の家に引ひ取ら也改め
て手ふ助ぶ者ふ。五ふ郎が家く尋ふ。銀雛幸若云べ
ざるの身乃ふ。雑踏く青雲自づふく旋り来り。巨万の金銭を有
ふる。富商乃者ふと成り。生涯の安楽。実に人も羨む計ふ成
る。却説源伝の大る件漸に落名なり。引金に出しく人も恐を
れ。麿平伴風等も甲州へ迯り。茂右衛門も捕人二使安等に姫を給り
ける金雛を貢ひ。恐縮ふ信濃路へ過達を促しぬ。又吉ふある丁子屋市兵
衛の手代小忍夜丁山ぶ身の上乃形ちさを知て。密に思ひ妖の被衣ぶ身も脱

書を呉る姉妹の二婦、同時に丹助に引渡し、丹助は姉妹を呼び、懇ろに技助し、又已れが子の書の児、今年十三歳に成りぬる面白と、ほめたる。

ゝ嘆て、涙の せ迫り、遂に家を持しめ、十三郎が成人して、丹助姉妹が身のさまも宜しくなんとて、勝山、其志ざす所を問へば、姉は

若衆に深く契り、手を取て、世に亡きものと成り、今は他に嫁せんも、殊に去年、弟の花見を吊はんと、佛つとめ、双親を弔ひ、菩提を吊はんと

心作と、若く妹、勝山も姉が志しに感じ、世を捨て世を迷ふ、若衆、剃髪、二世夫婦の契約せし。遠山を有るに非ず、妾が如く死別と成り、山の又間ど

ゝまで、二人の間、二個の人の書と成り、互に世間を送る。孝子の誉、ゝ又、去流ゝ、能く去山を、身のことを謂りあへと、流けば、丹助も雄文が孝を可

なりと為し。彼に嫁がる知宜う。左く決せよ。其中、去山、成し、能く云

法せよと示す。若し、勘四郎、丁山が丹助に引き、邑を知り、一日丹助を家

に招き、丁山と約せしの有を語り。改めて妻を迎んの商後、丹助、大に悦

び、異議なき旨を示す。山、を、丁山、兄、を加へ、と、迷う。勘四郎、山、

推て、知己の武士を頼て媒妁へと成し、吉日を撰て、丁山を家へ、成書へ

成ぬ。孝子五郎、久八の二個、小彩、千代郎に貞操を立、夫を持ぞ

て、猶亡き人の跡を吊らん志しあるを、少知るべし。娼妓に好けるを志しな

ん、千代郎、因有る婦人、我方へ、世ひ、く世、張り、遠さん、商後、竟に、丹

助に、妻、細の物語、して、ふ、衣、身を引、り、彩さに、一の家を持ん、何、堂、く

、、、ぬ、ふ、衣、又、、、風、雅、て、文、筆の、を、馬、、、佛、石を、用、姉、と、号け、佛

事の間出雅友を集めて。時々の月花を賞優ふ世を送り行く。早光陰も
いつとなく明日は享保四年の三月中旬有し。徳永左衛門は忠右衛門を家に招き。兼てより
和合に妻と世話なん縁朱有り。掛々の難なのくり繰きて。まづ清きこと。我今南
儀一日人思ふ郷女。三名有り。人迎んと何みと問ぬ。時に忠右衛門は丹助が家に
有る奥様をくんと掛居て。頭りに件の婦人を迎度由を物語りもとり。もとて邪
あるを指ちはこと。強き見かり。彼乃女我もとめるすべ有ると云る。
標致をもくく魂くうくも。和合に急めんと思ひしるの。敢なきつまで。
婢女奉公と為居る婦女。同の巴つの後業もつまづく思ひ。彼を
密に我うを出さうし。能く考ひ。もつ望をかくくも。我宜ところくひ。
かちまちくに世の人九つく和合に逃まべしと巻くかり

第世五回　曠野の春霄兇賊遊人の災を

忠右衛門は奥様に執着。婚姻の日を思ひへての形そに徳永に伝ふ張
成。一日丹助は物語り。又奥様の見人に給を流き。郷法る暫よく形く
奥様を忠右衛門に媒妁為り。丹助又婦女乃弟祝ひ。
道具形をと整へ婚姻の日。曠野に歩くかり。徳永も丹助が男氣なるを
見て深く形く交加成。奥様生憎悔けるを。郷せ。其日とかるの
を深切にかり。第夫の心を計人へとを計り。一日も接遍を損せるを。忠右衛門
心程人今をの相撲をく。偽見一心に商業を勉強せり。元より商の人達者
なる男ふもとば。彼の内に浪人を稼ぎ出。丹助が世話せく両国橋町に
同居せり。商者通く繁昌あけり。又主の平を我忠義を逃て外にん

を配るつもりあり。呂宋葉のこゝを安穩なるべきと山勘四郎法くまを忠
を感じ。引きて遠ハさんものと真平と招き。若干の資金と賞し長崎中
と示し。多り。其平限りなく拾び迎ての農家より出る者ハ
南流と宮ゆ。三百山より一百人金の金を借り求め居と藁草の形り
移しく南蛮と問ふ勉励もくるの宝を異のひとり。形もと唐太
に無島しく。石垣さかき多くく成りぬ。わび方法道の助の二個を家り
引ゆり。名目由かく技拙し。又手段も事をむく未だ毎しく世と送りする
寒年葉を別流悪流の異千ハ。姫八婦吉等ゞ為に使価と打れ。恐を郷
し共く物を天宮に為らもとし。心中懐しく。物の敵ゞと知
まバ。先格場の地を三人とまつく。段淋の迎と絶嘗せ。寄別の手

も多けまバ異千又田葉と感し。形を郎と海て。流路く都をより。大岡
寄の迎ゆく磨と枝り迎ゆ。先の日橋橋ゆく撒乱せ。博
流ども流り生りし。三四流拾ハ居く。又ふんを合せるを薄ん中と言の。
異千意く時葉を引隠ゞ格く。流安房の去ゆを朝乱り陸ゞ敬ゞ
て止りざく。引迎して中橋多の羅さ海し。を切り繁に拾を郎
等ゞの流。六七拾中橋迎ゆ共く妹ゞの異千三書を拾く。多の流ゞ
を切り。又合して回類断ゆ。十三四居と成り。異千断葉ゞ拾流ハ合内
を廻り。宜しけまバ。御う駅計と意を使ふに昔日宜を絶ゆし者ゞも。
今心解け。時異千ゞ指揮を受り。残るに異千等其地ゆ止り難くして。
回流と共く千葉驛をより。流金の迎り。利根川ゞ為る布佐郡川の羅

を胡乱つき落るるの後ハ齟齬のこゝろなく又大いに窮迫なく進退ゆき窮り此に於て悪計を巡ら山野に潜伏居く夜盗運利を為ん較計を巡ら同業尽く悪掘共あまた谷々を探索し已に高槻辺地に来て所業を成ん為ハ旅人の歩人きゝ地さ如くるゆゑ一と竟さ白井藤谷の辺に現出来り山籠して居ハ旅行人の姿さ扮ち一人二個づゝ所々を徘徊し悪人金しゝく頻りに盗て働きなり此も四年三百日ゆゑ其〻有り上日無稽なより荷を運ぶ農家のうちの年が家〻なりく。田畑の荒廃を初めさりまた年氏族沼を連ハさん由さ絶し逆ハ此の拒ると雖ども人を以て勧めなり。相て去る紀時明ゆて韓国を来ると。国お要道の情を誘ふ時所コハ此の一拠無名花の地さ並居る人ゆゑ

歌つて興を益す者人〻て打連て沼ん〻ニ若ハ勘四郎が家を山陰を通丹助絵を右衛門忠兵衛婦人ゆ。おさつ村木の三個あり。村さ年間流遷いくさ加ひる能なを已に出さあの日本おさ人を思ひくゝ食物を授く。同時さ高ふさりを賞ふ。おさつハ過て助をも引連さ八名の妻人路さ雑話笑語しく扶さ兵庫さの村〻年〻の家に上宿を定め長崎浦さ〻沼中を成し或ハ四辺の名所旧跡を一覧あり。終く人家村乃通行さ山野さ拝んぐ歳と取相ませり此の系路。強く助を憂なる暇所所〻ゆ東ハ大和田さ連り。西ハ海谷松戸の辺さ境し。北ハ大森寺の四さ境さ。八名の人さ此の厚野さ城の海を渡るを泛知ぶ。ひて物語を先ひ。彼方此方と呻吟ハ間最高き寺日も御やく〻さ四方ゆ〻ち野〻花開

ちく一ツの小藤を求め。何まの村落にもるべしとんあるべしも一里計りを
歩し切に思ひ小家らに渋谷の子細を問ふ。答ふ。忠義大
いに安堵す。もとより人情の如く。ハ道ノ方ハ丹
の内あり。速く切んと云へば。而こ忠義ハ腰を拔ひ。稍四五寸も出し
と思ひ。傷の痛り強く。早くきず。十四人四人一切を第一路之を躍り出
切先を寒きう。先に進ミ。忠義ハ忠義の用を為せ。情を捨て腰の切りに丹
助左衛門が面を遠一つ。切付に声を掛け。コハ横場中。闘合。相手
るを能きまして切合たり。用法迷惑と思ひ。如系殘りなく切殺して。背情
を敬。甚こに奮ふ。の廻り奪ひ九也。こ切りたり。是十五名等ハ
あり。切とあるより四方を一切を接放ち。切先拔へ。砂てうる。此方の八名

スハ賊と云ふ。ざあらぐる。如撃を帯せ。ハ優を進と云ハ右馬つ汁ゆ。丹助
鈴吉等を以寸鉄あ。優を進光悟を拔め。一個刀を接て賊を合るに八方に帝
り。挑み闘。彩木玉滝の三婦人ハ道を助を引連も慌て。此の場を逃出。渋谷然
乃方へ死て逃。一くるる。三個の賊を。闘争の場を接出で。遠ざ。退の為つ
く。竟に二人を捕へ情。も。接路鐵を。奪ひ。刀。膚着。つ。成。く。退
放。り。三個ハ進退窮を失ひ。優を進丹助等を。敵大勢力ハ。生死も知れ
ず。慮を。居を。又如何ある。優同を出達んも知ず。渋方かくも元
来。野中の道を隠り。ひき。合。村の方へ。郡。ぬ。闘争の場ハ。右馬一刀
と接拔て。優を進に力を合。秘術を。。て。砂合。中にも。刎。丹助。渋吉。
傷乃竹木を拾ひ。。く。同じく拒ぎ闘ふ。暮に。渋吉ハ二。所の。落を。有。に

おとら
おりき
小次郎
息高於吉
妹芝貴十
丹助
塗城

おとら
塗城
孫右の助
らに優る
進塗城と
高戒と

憑どなるは和合なれば此場を逃出さんと賊
丹助危さと見て棒令より躍り入り賊に組付き力を以て捻倒し
賊の刀を奪ひ丸たり賊憲是と見て遽り一人近寄るに拾手丹助婦の賊
を殺すべき迫あく強者る三賊共渡り合ひ又数合の内丹助八賊の刀を
奪ひしかば勢ひ十倍して三人共に切立て矢庭に一賊を切倒す
こと迅八武術捨も捨て関合同賊三人と破倒す五人を負傷
此の勢ひ辟易して盜をうとせず者共ども殺さんと戦ふ心あく晴きに
終日切伏し邪深傷の三人と情抱し斗くは逃去る関事せず四人
踏の傍に集り一息吹て答を疑と改め見るに殺く関合優さ進数ケ
所乃疑と覚り丹助給者八者二ケ所乃落を負ひ幸に左脇つ股乃

疑りに成り疑を所受しのこ共く酔者に忠義八ものて氣情き性
あるもの関事の拾め婦人を共に所に隠を忍びて極を窺ひ細乃
退くを見て関事せず殺ず出ず切死せず人の者を見て且驚を狂乃
着なんどを引剥優く進ものを疑を春ものし情抱し兎まを殺の
羅に出るを疑を高も疑し面く忠義八者ども言葉に隠人優之
進を助けて逃去に八儒の職に出居ものを見当し茶屋に入て答高
遂成に乃事知ざる二婦人迫を助ず分のこも心掛りなきば多用の忠義八幾り
居く乃南と尋ねんと出し丹助給者八者共居れば治部も加へんば
べくもなくて優く進と乃乗に答に二人い者して茶屋を出て遽り江戸に
なる迫り先ず優く進と春日所なる主を玉が家く助けんとの旅者を為て。

四人伯父の福島を逃しなさぐ留守ハ去のふ怒り憤り遂成共ハ敵人を
連到つく。庁端う賊を而平らぐんと先つ優を進を家に送つく療治を成さ
しめ民族いとも文し極八郎吉徳永の三人を指ぎ賊の退治を南伝を命
八郎吉申極八這奴等ハ皆高名の小賊共と先し討取く何の難きるとあら
ん我を四五人の四方を遣て都べ或ハ生捕を剛きハ砂仙ハ為せ逃らん
ハ心と労せず我等に委ねべと勧む徳永思案おし二侠客ハ賊を平らげ
んの疑ひ有ビコ其任に当とり立ハ為ん生馬為ん之るもみほじと異見を
勘四郎徳永ハ諫めに随ひ竟に二侠客を都おきりぬんに来たり彼て丹助
鈴吉ハ其家に立返り外科の医を招ひて二侠客ハ傷出を治ふ薬ハ
渡くして水イも整くに及ハずと云ひ膏薬を与てて返りぬ此く旅を嘉

家に留り居ん心なり。再ひ帳八等ハ力を合し遠慮を為ん賊共を尋く捕
ん。然の漁師等に報知て加勢を乞ふ。漁師等四五名駆集り見ハ恩を受
し和義ハ為ハ付除て其時ハ都りんと接拒を。丹助力をひて山賊ハ殺
しく法者と准ましく。てこれハ公の捕を捕と腰ハ各長脇差を差せ一人ハ鉄砲
ひけまこハ漁師等を指く絵吉と共く遠山ハ家に寄り二侠客ハ同乗せん
遠ぶ又小船ハ番なる三人ハ乗遠を助兵ひふおみの船ハ賊の船を助
知まとて安く思ひ二侠客と共ふ乗つく。案ハ人物を乗ぶ
遺物ハ一刀を取ハて被に色を掠へ
都むきを告げ和ハ沙まよと勧ハ平ハ難くるを方なくも取物を乱
身拵へ。遠吉と吉小勘四郎ハ家に駆ハ集りたる人々とそ。

且汝が斯も多人数なるが残りなく生捕術も有らんなるべしと二侠客
各野猪乃お捻て身拵へし双刀を帯し手に四尺余りある浅樫を携へ勘助
より附属したる若党三人を引具して丹助逸世等が輩と東をさして発足
なし鎌倉に五六里の行程逆井通を歩して各地を尋ねて到着しけるが悪
漢に逢て彼等みの等が在所を問ども更に逢り知るものなければ奥まで
と尋ぬ宿の主に進て出ぐく真平二侠客等に其由を識て不慮の災難一部始終を
て聞の毒ハ限りなけれども今般遂くより男共三四人を遣ハし鎌谷八幡の辺
迄も方々野原山林等總に尋ねさせけりしに三人に旋り逢ず又死骸
とも見付ずと申来ありしが去れば此命ハ全ふ有らんが何処へか遠く逃去
りけんと告ぐ丹吉是を聞て此様ハ賊の穿鑿ハ後にもならん先も前も

三人の行衛尋ねばんで有べからず是より六手に別して猶も手を尋ねん
るべしと案内の男五人を雇ひ是より手配して左右より頻りに野外の村々を
尋ねけり去程に斯は親子彼等の二個ハ陰術有て先導ひ来り路ふ近辺を彼方
此方と漂ひ歩めども品橋の方へ返らん方角もしらず歩行しがとて何ハ為らん
と覚に道の傍に石を居の天を仰いで只嘆息し居たり彼る所へ向ふの方を
遥に眉たる五十才余りの老丈杖を携へて飄然と歩み来り二人の老系を見
く去所審り御身達ハ甚中何方に居て何事を為るみなでえるに婦人を認見刻
さへ何とも肌着一下の春乃未だ秋かなで最寒きに河ハ冷も居ぎるなと問へば
彼木ゐみハ老夫を見て賊党中も逃れしと知けれバ逃るべき路を問んと思ひて
酸鼻たる面を挑げ妾等ハ皆江戸乃者なるの品橋の生れ知る者有て四五名

の男の連と共に小山の原へ探索に出る道に踏迷ひ雪降り
つきて人馬へ凍らんとせし時と思ひ侘らもせる程の盗賊に取掛られ連の四人
残る閑ふ四婦女幼児の物乃後ふもろぎれば思くまもなく人に成らんとすりはとも
塩を絞るに二人の賊追迫られ彼の如くに身の四方を剥ぎられ呉命計りを
助かり出る所へ人のるもきび連の者とて生死も知ることを惟とはさんいも知る者
まと長橋の文を渡る路と教へくもへと問つるも潜々と泣ば始終を聞く老婆の最
感に思ひ人ソモ危きるひとく有りの所に逃れ剛なる賊の出る事を聞
り賊らぶ出き身賊の表に銃剣抜き出て賊服を掛ざれば泣に逃
るあり。偶他り来ませし人文に旅人を捕へ賊を捕て縛りて逃るを追ること浦り。
相尋思まく又長橋の出中逃られんと長橋に来る人

有りとの咄。且は注方を知ぶ疑ふまもいなく共に出つて入る貴我家に泊
り明日縛に逃らまと我注文は法の先の寝の四井と申安心と老婆に云へば。
二婦人乃ち助の品を捨に賊に進退極りなる我を捕へ助けんと頼りて実に
ば先文は出て最寄も人が居まを尋ねさを絶し常ある家は程
浮びなれども一病なる文は路筋は長橋への注来に非ず他の村落へ出る小路
なり。何とに泊て来ず遥るみち迷ひて来ぎ遥へと遥く
助と先に立て行く歩を繁しけるに病来
先文が家に逃き一夜の病を求めり。去ても三人は草臥疲れ
地一瓶あけるが為にて文の出の二個瓶の品地の。発熱悪寒あるく身
起るる能なく加けの道に助の病の作まそく大に呻く苦しみ三人が

枕辺に立ち寄りて心と労し氣を揉むより限りなし。老夫願めて曰く安堵なる
ものかな。我の妻病に臥して暫くも離れがたし。今を盛りと咲き誇りし
多地方の酒を迎へ診察なし給へ。婦人曰く病人の味を尋ねて酒餅の効能甚
だ切に有病なれば。其旨の言葉熟慮に解し二婦座に居りて
を始めとして木芋の煮物に一杯の酒を求めんとて生憎に酒肴
に限り有き五世落を吏さう。早二個くらも少し心地よく具切合一人なるも。
幸ひ酒肴に有と等り。毋樽へ高迎らん。勝りに懸拖を吏るも氣の毒
さの多きを以て与へ老夫八頭を振り居々左有る心迷ひに改ぶ。今おの〳〵
熱も退きて全治せん小口逆らんとて野外の風に吹られまじ。家の為に宜しき
二三日の内共治るべし。後を療養なし給へ。今日梅毒と呼つるに城

と関帝ハかりしうど救さるもうし人も有るまじのうし。我も亦梅
毒で逆らく第こせんと悦慶さめ。沸切なる扱ひに二婦も少し安法
なるく。なを然に泡ひ見より種々の抱腹りを命し。打先又老夫ゴ腹腹
を尋有内へ帰つく答て曰く我ハ江戸神田生
毋く幼時名ハ体富と呼び極く世の中乃るも為尽し。去る年書に
身まづく見通りの不自由さも限りなれば。郷老と役り江戸に
相移しく。中郷の清貧を逆り暮まに有り。老一男一女と持ち。
時を清河に後し居まで運拙かくしく活計も易うく旅乃
商ひのと絶き居り。又婦人ハ五八と云る老こ嫁ぜ一人ぐ見も
窮苦しくみうと為るうり。今居るもみつハ我ろ小藤ちゃうの図み

あり。かの和泉守と申すものの妻ゞ親家なれば、そこなる老婆ハ名を神見と申せしと思ひ、若しまた人世てい生さぬやと問へば、老婆
女房答へ、コハ思ひ掛なきことなれども、吾が娘神見と申す。年五
八ゞ親者と申すに、問ひ申すの一ツ有り。近世とゝぐる中き婦人を知
らざるやと尋ぬ。あみつぶ曰く、其婦人い御ふ山の男兒乃姉なるべし。
是を問ひ申さんと、定めて、娘ハ、より青梅御道の高雄城崎を調来
と申すなるべし。是を聞くなり、伴左衛門、然るべき御帰り申す身
命を、ゆらぐ。然らば、和泉守の申者。まさに妻女を無らまさと同ふ。おみつ
是より我名を知り、夫道中の卑屈乃恐ゞより、出発長崎
をあるまじきこと。なれども、又逆世ゞ出所事廉とも最見さに遂ぐ後。

斯互ひに問答し見ぬ。くに因縁有る人々に有りしまと。頻りに寄遇
と感嘆ありけり。伴左衛門大ひに嘆嘆なし。天理已に明のでし。始めに我娘
城崎に遂ひしと。あみつぶ義理有る娘に殺生。今を又父代つく家を
毋と成敗ふ自ら天乃然ら思ひる事知ゞ。しく此の者に有る。人分の
能く見ぶべきに涙ぞと云つ。伴左衛門実に情把おけう。扨も二位客母助
等多ひけと申しく。二婦人と密しけるとも。竟に知まぜ容宅しく密
酒に至り。扨に王夫を運らしてう密右衛門と心を揃へて
評議せるに。絶入り稀々成一個有し。捕へ引き来たるば婦人のひとも
問ふ御門。御かゝん。山ゝ我々無ゞ。道路を引き。賊と泥中しく捕
ふる御と。ゆんさの汁ゞ人数八百一ゞ。ゞ業に連せ。若二ゞ人多と

暗なる法方と為りき。俗共とこゝく剥乳易き旅行人と思ふなれん。
縄合乃道と称く成して歩行き。四五日を續けまば必ず成に出逢ふ
きあり。稀なる味の汁とやく為果ぜんと述べくるり
因ふ所人旅客の成況に遇へり。古今手例をもこと多し。
かくて山野を歩し隔絶の幽地と都く者。わるく心せざるんで
有べくるべし。猶乃成を婦女と携るの人道乃汚潔ぞ行要為且
注を厚うしぎんで思慮の雖く遠かとまくん予世人の為く
微と一言を具せ